

2022年5月22日（日）復活節第6主日

銀座教会 主日礼拝（家庭礼拝）

礼拝招詞 「わたしは知っている わたしを贖う方は生きておられ
ついに塵の上に立たれるであろう。」 ヨブ記19章25節

主の祈り

交読詩編 詩編34編3～7節

わたしの魂は主を賛美する。

貧しい人よ、それを聞いて喜び祝え。

わたしと共に主をたたえよ。

ひとつになって御名をあがめよう。

わたしは主に求め 主は答えてくださった。

脅かすものから常に救い出してください。

主を仰ぎ見る人は光と輝き

辱めに顔を伏せることはない。

この貧しい人が呼び求める声を主は聞き

苦難から常に救ってください。

使徒信条

讚美歌 23番 くるあさごとに あさ日とともに

聖書 創世記3章1～10節

1 主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」

2 女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。3 でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

4 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」

6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。7 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

8 その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、9 主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」10 彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

牧会祈祷

天の父なる神さま。新しい朝、あなたの招きに応じて、御前に出る恵みを感謝いたします。神を神とすることを願いつつも、自らの傲慢を抑えることが出来ない弱さ惨めさを経験しています。新しい朝、今一度御前に砕かれ、あなたを心から礼拝する者としてください。復活の主の御声によって、あなたとの信頼を回復させていただきました。健やかに主の御名を呼ぶ者として下さったことを感謝いたします。

家庭礼拝をささげる一人一人と心をつにして下さい。次主日、臨時教会総会を開催します。神の御心を求めて主の御前に集めて下さい。

キリストの御名によって祈ります。アーメン

説教 「崩れた信頼と神の期待」

牧師 高橋 潤

創世記 2 章には、神がお造りになったエデンの園について記されています。2 章 8 節から 9 節「主なる神は、東の方のエデンに園を設け、自ら形づくった人をそこに置かれた。9 主なる神は、見るからに好ましく、食べるに良いものをもたらしあらゆる木を地に生えいさせ、また園の中央には、命の木と善悪の知識の木を生えいさせられた。」そして、神はエデンの園をアダムすなわち男である夫とその妻に与えられました。

創世記 3 章には、神が造られた蛇が登場します。創世記によれば蛇は野の生き物のうちで最も賢いとされています。地上で最も賢い蛇と出会う前の夫と妻は、神の言葉を聞いて、神のご命令に従い誠実に生きていました。神は夫とその妻に対して、「食べるに良いものをもたらしあらゆる木」を与えました。神は彼ら夫婦に日毎の糧を豊かに十分与えました。神は命じます。「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」（2 章 17 節）と夫であるその男に語りました。その後、神はその男に「助ける者」として女を造りました。

最初の夫婦は、園において命の木の果実を食べて新婚生活を過ごしていました。エデンの園での生活は、神が園を歩いてその夫婦に声をかけると、その声を聞いた夫も妻もすぐに答える、信頼する神と共に過ごす生活でした。園の生活は、神の声に夫婦は、聞き従い、神を信頼する土台の上での生活でした。

神はなぜ、食べてはならない善悪の知識の木を園の中央に生やしたのでしょうか。神のご命令を聞いているならば、園の中央の木以外の豊かな命の木の果実で十分なのです。命の木以外に善悪の知識の木は どうして必要だったのでしょうか。神は最初の夫婦に神との信頼関係を築くために約束を与えました。

神は、蛇を造り、蛇に自由を与え、この妻と対話する自由を蛇に与えています。神は善悪の知識の木の周りを立ち入り禁止にしません。手を伸ばせばその木の果実を取ることが出来るのです。この夫婦は命の木で満足していれば、死ぬことがなかったのです。しかし、善悪の知識の木の果実を食べると死んでしまうのです。神は最初の夫婦に、自ら信頼関係を築く自由を与えました。

蛇は男ではなく女に声をかけました。蛇は女に「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」と聞きました。女は蛇に答えました。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。3 でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

蛇は直接神のご命令を聞いていた夫の方に聞くことをしないで、妻である女に聞きました。蛇は、女に聞くことによって、夫を通して妻が聞いた神の声を妻に語らせました。2章17節と3章2節以下を比べると、神がお語りになっていないことを妻が語っていることが分かります。神がお語りになったのは「園のすべての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」でした。女が蛇に答えた言葉は「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。3 でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

妻である女は「決して食べてはならない。食べると死んでしまう」と語られた神の言葉を言い換えました。夫が神から聞き、妻に伝えられ、妻が蛇に伝えた言葉では「善悪の知識の木」という言葉は「園の中央に生えている木」に変換され、「決して食べてはならない」は「食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから」に変換されました。蛇の誘惑によって、妻が蛇に答えた「触れてもいけない」とか「死んではいけないから」という言葉は神の直接のご命令ではなく妻の解釈による言葉です。蛇の仕業は、神の言葉を人間の言葉として聞かせることにあるのです。蛇の誘惑は見事に成功し、最初の夫婦と神との信頼関係を崩す準備が整えられました。

蛇はこのようにして、神の愛の命令を人間基準で聞くようになり、人間理解を優先させて、語り直させました。神の声を人間の言葉にしました。その結果、神の命令に対して、疑問を持たせるように誘導しました。蛇の巧みな誘導によって、妻である女は神の命令の内容について弁明する立場に立たされてしまいます。

蛇は神がすべての木から食べてはならないなどと言われたのかと妻に問い、妻は神のご命令について弁明させられ、神は果たして正しいのか、神は善なのか悪なのか考えなければならなくなったのです。4節「蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」蛇は見事に妻である女を誘惑しています。神は誰なのか疑わせ、神を神とするのは神ではなく人間なのだということを教えようとしているのです。

「6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。7 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。」

夫婦二人は、神が「決して食べてはならない、食べると必ず死んでしまう」というご命令に背き、善悪の知識の木の果実を食べました。自ら神との約束を破り信頼関係を壊した二人は、神の顔を避けるようになりました。神の声に喜んで答える者から、

神が恐ろしくなり神の前から隠れて生きる事になりました。神との信頼関係が崩れてしまいました。崩れた信頼関係を回復させることは困難です。

人間が神から離れてしまったのは、食べてはならない木の果実を食べたことよりも前に、神のご命令そのものの善悪を問題にし始めたところに原因があるのです。神のご命令そのものの善悪を問題にすることは「神のようになる」という罠に掛かることです。善悪の知識の木を果実を食べた二人は、何を知ることになったのでしょうか。二人はそれまで気付かなかったことに気付くことになりました。それは、二人が裸であることです。二人が神の前にそのまま出ることの出来ない自分自身であることを発見しました。神のご命令に従順であったなら、裸のまま自由な関係が続いたことでしょう。ところが人間が神との信頼関係を失った時、人は神の前に胸を張って立つことが出来なくなるのです。神を恐れ、自分の身を隠すほかなくなるのです。

最初の夫婦は創造主なる神の御前にそのままでは立つことが出来なくなりました。創世記3章が私たちに告げていることは、神と人間との信頼関係は、神の恵みにもかかわらず、人間が神の言葉を疑い、神の責任にしてしまい壊してしまったことです。そして、崩れた信頼関係を神が回復したいと願っていること気付かなくなってしまうことです。妻は、神が創造した蛇の責任だと応えます。夫は神が創造した女の責任だと答えます。約束を破った責任を神の責任だと責任転嫁しているのです。これが最初の夫婦の罪であり、私たちの罪の正体ではないでしょうか。神の責任を問いつける人間の姿があります。しかし、このような惨めな人間との関係回復を期待して、見つめ続ける神がおられることを見失ってはなりません。神は自ら信頼関係を壊した最初の夫婦に、すべてをご存じで「風の吹くころ、どこにいるのか」呼んでおられます。今日、私たちは神から「どこにいるのか」呼ばれていることに気付きたいと思えます。神の御前に立ち、復活の主によって神との信頼関係を回復したいと願います。神に向かって、主を賛美して、信頼関係を確かなものにしたいと思えます。

祈り 天の父なる神さま。憐れみ深い神は、約束を破り、あなたに責任を問う最初の夫婦を見つめています。にもかかわらず、恵みをもって呼んで下さる御言葉を読みました。待ち続けておられる神に立ち帰る勇気と信仰をお与えください。御前に悔い改める祈りをお与えください。キリストの御名によって祈ります。アーメン

讚美歌 270番 信仰こそ旅路を みちびく杖

献金

頌栄 544番

祝禱 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。 アーメン